●書学書道史学会
会報
第7号

平成16年(2004)6月1日発行
編集・発行
書学書道史学会
事務局
東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031　美術新聞社内
TEL(03)3462-5251㈹
FAX(03)3464-8521㈹

緊急報告

日本学術会議の「登録学術研究団体」制度の廃止について

五月八日、日本学術会議から「日本学術会議法の一部改正に伴う制度の変更について」と題する文書が事務局に届きました。

それによると、この四月に国会で「日本学術会議法の一部を改正する法律」が成立し、公布されました。この改正により、日本学術会議会員の推薦制度が変更され、この推薦にかかる「登録学術研究団体」（一、四八一団体＝14年度現在）制度も廃止された由であります。本学会では、平成8年度登録の第17期、平成11年度登録の第18期、平成14年度登録の第19期と、三期連続で同研究団体の一員として日本学術会議会員の推薦業務に関わって来ましたが、この地位も失われたことになります。

これを受けて日本学術会議では、同じく四月に開いた総会において、「従前の登録学術研究団体と日本学術会議は、研究連絡委員会の活動等において引き続き連携・協力することとする」などとした決議を採択しましたが、本学会としても今後同会議とどのように関わり、またどのように参加の意義を見出して行くべきか、同会議の組織改革の推移を見きわめながら判断していく必要があろうかと思われます。以上、お知らせします。

（事務局）

◉第Ⅷ期新役員会発足

任期満了に伴う役員改選選挙が、二月十五日～三月十五日を投票期間として実施されました。各位のご協力を深謝致します。選挙管理委員会による開票、当選者決定を受けて、三月三十一日に開かれた第三十四回臨時理事会において、以下の「第Ⅷ期新役員会」が発足致しましたのでお知らせします（6～7ページに役員紹介掲載）。今期新役員の任期は、平成十八年三月三十一日までとなります。（○印＝新任）

【理事長】興膳　宏（京都国立博物館館長）

【副理事長】杉村邦彦（四国大学教授）＝国際局長＝
田中　有（大東文化大学教授）

【常任理事】新井儀平（大東文化大学教授）
大橋修一（埼玉大学教授）＝学術局長＝
萱原　晋（カリタス女子短大講師）＝事務局長＝
澤田雅弘（群馬大学教授）＝会報編集委員長兼将来計画検討委員長＝
○杉浦妙子（二松学舎大学講師）＝会報編集委員長＝
中村伸夫（筑波大学助教授）＝編集局長＝
藤木正次（日本大学教授）＝財務委員長＝
古谷　稔（大東文化大学教授）＝国内局長＝

【理事】河内利治（大東文化大学教授）
鈴木晴彦（昭和学院短大講師）
辻井義昭（北海道教育大学札幌校教授）
○富田　淳（東京国立博物館主任研究員）
名児耶明（五島美術館学芸部長）＝講演センター運営委員長＝
福田哲之（島根大学教授）
○森岡　隆（筑波大学助教授）
横田恭三（跡見学園女子大学助教授）＝普及委員長＝

【監事】浦野俊則（千葉大学教授）＝選挙管理委員長＝
野中浩俊（新潟大学教授）

【幹事】○池田利広、小川博章、○笠嶋忠幸、柿木原くみ、○萱のり子、○菅野智明、下野健児、高城弘一、○弓野隆之

本年度・第15回大会開催案内

本年度の第15回書学書道史学会大会について、お知らせします。大会は今年は、11月5日（金）から7日（日）までの3日間にわたり、東京都文京区本郷の東京大学法文2号館＝写真上＝および大東文化大学板橋校舎＝写真下＝を会場に開催の運びとなりました。

詳細プログラムや発表者、各種案内等は次号会報（10月1日発行予定）にてお知らせしますが、現在までに固まっている大要は以下の通りです。

○日程＝11月5日（金）午後4時30分から第35回定例理事会開催（会場未定）。

11月6日（土）は東京大学法文2号館において午前9時受付開始、9時30分から総会、引き続き研究発表を順次行う。研究発表終了後、お茶の水、水道橋地区の会館等（会場未定）にて恒例の懇親会を開催。午後8時終了予定。

11月7日(日)は午前10時から、東京都板橋区の大東文化大学板橋校舎（中央棟・多目的ホール）において記念シンポジウムを開催。シンポジウム終了後、同大のご厚意で、同大所蔵の故宇野雪村氏の拓本コレクション（宇野文庫）の特別鑑賞（解説あり）を予定しています。

○会場案内＝〔東京大学・法文2号館〕〒113―8654東京都文京区本郷7―3―1・東京大学構内／交通＝地下鉄丸の内線「本郷三丁目駅」下車徒歩20分、地下鉄南北線「東大前駅」下車徒歩1分／JR「お茶の水駅」「上野駅」「御徒町駅」から学バスの便あり（構内バス停利用）。

〔大東文化大学・板橋校舎〕郵便175―857 1東京都板橋区高島平1―9―1／交通＝東武東上線「東武練馬駅」下車徒歩20分（スクールバス利用可7分）、都営三田線「西台駅」下車徒歩10分

○備考＝今年の大会ご参加の方々の宿泊に関しましては、ホテル事情のいい東京での開催でもあり、事務局では手配致しません。各自、お早めに準備をお願いします。

本年度・第15回大会研究発表募集

今秋の第15回大会は、第１回・第２回大会で使わせて頂いた東京大学法文２号館で開催の予定です。２日目のシンポジウムは、大東文化大学での開催を予定。熱い議論が戦わされることと思います。東大での開催は、学会発足15年を迎え、初心に帰る意図も含まれています。15年という道のりを考える良い機会でもあります。発表会場も２教室確保しています。奮ってお申し込み下さい。

記

1）日時：平成16年11月６日（土）午前～午後（今年度も日本部会・中国部会・全体会の分科会方式を採用する方針です）
2）発表時間：各40分間（質疑応答時間10分を含む）
3）申込方法：適宜の形式の「大会発表申込書」に標題・氏名を明記し、800字程度のレジュメを別紙で添えて下さい。
4）レジュメの形式：発表決定の方のレジュメは、10月１日発行の本会報第８号に掲載する予定です。形式は原則としてワープロで作成し、テキスト形式でフロッピーディスクに保存して提出して頂きます（メール可）。なお、レジュメには図版や表は掲載できません。
5）申込締切：平成16年７月９日（金）＝必着＝
6）決定と通知：学会常任理事会および大会運営委員会で決定し、個別にお知らせします。

※本大会発表については、編集委員会は学会誌『書学書道史研究』第15号（平成17年秋刊）への論文投稿申し込みを受理したものとして扱いますので、改めての学会誌への投稿申し込みは不要です。
※発表者の論文原稿の締切は、平成17年３月末日です。原稿は、査読委員会で採否が決定されます。学会誌掲載についてご不明の点は、編集委員会まで文書でお問い合わせ下さい。
※大会発表申込書とレジュメ（フロッピーディスク添付可）は、封筒に「発表申込・レジュメ在中」と明記して、下記宛にお送り下さい。事故をさけるため、配達記録郵便または宅配便をご利用下さい。

〈送り先〉〒150-0031　東京都渋谷区桜丘町29-35　ヴィラ桜ケ丘ビル７Ｆ
書学書道史学会国内局・大会運営委員会　宛

16年度事業・活動計画（案）

3月31日　第34回臨時理事会会議
4月10日　会報編集委員会顔合わせ会
5月9日　会報編集委員会会議
6月1日　会報第7号発行
6月下旬　編集局・編集会議（学会誌）
〃　国内局・大会運営委員会会議
7月11日　常任理事会会議
9月末日　学会誌第14号刊行
10月1日　会報第8号発行
11月5日　第35回定例理事会会議
11月6日　第15回大会（於東京大学）
11月7日　第15回大会記念シンポ／鑑賞行事（於大東文化大学）
12月末日　学会誌第15号投稿申込締切
1月下旬　常任理事会会議
3月31日　学会誌第15号投稿原稿締切

新入会員紹介（15・9～16・4）肩書は入会時

○鎌田美里　S55生　大東文化大院生
○向田正美　S50生
○宮迫英嗣　S53生　筑波大院生
○村松義明　S53生　筑波大院生
○大鹿まゆみ　S55生　筑波大院生
○福井淳哉　S55生　大東文化大院生
○宮内紋（裳夢）S55生　大東文化大院生
○杉本恵理　S55生　大東文化大院生
○中村健太郎　S54生　大東文化大院生
○川上大隆　S45生　大東文化大院生
○深田邦明　S46生　高校教諭
○藤村耕平（耕菜）S31生　高校講師
○藤根明美（厚華）S52生　高校教諭
○白井亜美　S54生　高校講師

随想

上海博物館蔵戦国楚竹書『周易』の書風

福田　哲之

上海博物館蔵戦国楚竹書は、上海博物館が一九九四年に香港の文物市場から購入した一二〇〇枚余りの戦国楚簡の総称である。これらは盗掘されて市場に流出したものであり、湖北省からの出土と伝えられ、炭素測定などにより、書写年代は前三七三年から前二七八年の間と推定されている。内容は儒家・道家・兵家・雑家などの著作八十種余りにおよび、その多くは佚書で、中国古代の思想・歴史・文字・書法など諸方面の分野の研究に多大な進展をもたらす資料として注目されている。

竹簡の図版・釈文考釈を収録した『上海博物館蔵戦国楚竹書』は、上海古籍出版社から全六冊の予定で現在刊行中であり、二〇〇一年十一月に『孔子詩論』『紂衣』『性情論』を収録した第一分冊、二〇〇二年十二月に『民之父母』『子羔』『魯邦大旱』『従政（甲篇・乙篇）』『昔者君老』『容成氏』を収録した第二分冊が刊行され、つい先日『周易』『中弓』『亙先』『彭祖』を収録した第三分冊が到着した（奥付は二〇〇三年十二月）。以下、第三分冊所収の『周易』を中心に、書法面で気づいたことを書き留めておきたい。

第一分冊所収『性情論』（濮茅左氏担当）の「説明」には、『性情論』と『周易』『亙先』とを同筆とする見解がみえる。『亙先』は道家文献であることが第一分冊の陳燮君氏の「序」に記されていたので、これに従えば同一人物が儒家文献と道家文献とを書写した例として注目される。しかし、今回『性情論』と第三分冊に収録された『周易』『亙先』とを比較したところ、三篇はいずれも別筆と見なされることが判明した。

『周易』は、比較的弾力があって曲線的な筆画をもつ書風（第Ⅰ種）と、細く硬質で直線的な筆画をもつ書風（第Ⅱ種）との二種類の竹簡からなり、明らかに二人の書写者によることを示している。これに対して『性情論』は細身の筆画という点で第Ⅱ種に近いが、横画の収筆を右下に旋回する顕著な特徴があり、第Ⅱ種とは異なる。また『亙先』は全体的に湾曲した横画をもつ点で逆に第Ⅰ種に近いが、起筆を強く当てる運筆に特徴があり、やはり第Ⅰ種とは異なっている。

『周易』の二種の書風と竹簡番号との対応は以下の通りであり、一簡中に二つの書風が混在する例は認められない。

第Ⅰ種〈十三簡〉一・五・八・二十～二十七・三十七・四十九

第Ⅱ種〈四十五簡〉二・三・四・六・七・九～十九・二十八～三十六・三十八～四十八・五十～五十八

上博楚竹書の全容の公表にはまだ時間がかかるため、全体的な分析は今後の検討課題であるが、現在までに公表された十三篇に限っても、極めて多様な書風が存在していたことが確認できる。上博楚竹書のような思想文献の場合、墓主の周辺で作成された遣策や卜筮祭禱記録などとは異なり、原著が成立した地域やその後の流伝の状況などを考慮する必要があり、おそらく書風の多様性にもそうした事情が反映しているのではないかと思われる。楚墓出土簡牘文字を単純に「楚系文字」とみる従来の理解は、そろそろ再考の時期にきていると言えよう。

書学書道史学会・講演センター'04
担当講師・演題一覧（50音順）

● **池田　利広**（いけだ・としひろ）
①「九成宮醴泉銘の字形と書法」
②「篆書作品の今と昔」

● **大橋　修一**（おおはし・しゅういち／号栩道、昭和25年生、学会常任理事、埼玉大学教授）
①「素材から見た書道史」
②「碑、法帖入門」
③「江戸時代の書―長崎貿易を通して―」

● **小川　博章**（おがわ・ひろあき／昭和37年生、学会幹事、淑徳大学専任講師）
①「画像石について」
②「雑体書について」

● **柿木原　くみ**（かきのきはら・くみ／号紫鈴、昭和26年生、学会幹事、相模女子大学専任講師）
①「熊野における山田寒山と伊勢の篆刻家たち」
②「山田寒山をめぐる文人達」

● **笠嶋　忠幸**（かさしま・ただゆき／昭和41年生、学会幹事、出光美術館学芸員）
①「古代・中世の絵巻と詞書について」
②「桃山時代から江戸時代初期の書壇史、書道史」
③「江戸時代唐様の諸相（墨跡と茶道関係を含む）」
④「富岡鉄斎の作品」
⑤「貫名菘翁の作品」

● **萱　のり子**（かや・のりこ／昭和37年生、学会幹事、大阪教育大学教授）
①「〈書の美しさ〉を考える」
②「書にみる近代的芸術観」
③「書かれた和歌が語るもの」

● **河内　利治**（かわち・としはる／号君平、昭和33年生、学会理事、大東文化大学教授）
①「日本、中国、台湾の書法芸術および書道教育の比較」
②「中国書法美学範疇論」
③「黄道周の書法芸術」
④「中国の思想と哲学」
⑤「中国文学と書法」

● **菅野　智明**（かんの・ちあき／昭和40年生、学会幹事、筑波大学専任講師）
①「近代の碑学」
②「書の出版」
③「書の論争史」

● **興膳　宏**（こうぜん・ひろし／昭和11年生、学会理事長、京都国立博物館館長）
①「王羲之とその時代」
②「書論の展開」

● **澤田　雅弘**（さわだ・まさひろ／昭和29年生、学会常任理事、群馬大学教授）
①「何紹基、趙之謙とその周辺」
②「代筆と模倣の社会」
③「飲墨信仰」
④「はたして筆法なのか」

● **下野　健児**（しもの・けんじ／昭和31年生、学会幹事、花園大学助教授）
①「近代日本における中国書蹟の収蔵」
②「日本現存の宋元法書」
③「慈雲の生涯と書法」

● **杉浦　妙子**（すぎうら・たえこ／号華桂、昭和25年生、学会常任理事、二松学舎大学講師）
①「平安期における仮名古筆について」
②「日本の書論について」
③「古典文学の中に表現される書の表記について」

● **杉村　邦彦**（すぎむら・くにひこ／昭和14年生、学会副理事長、四国大学教授）
①「中国の書人の人間像とその書芸術（王羲之、顔真卿、蘇軾、米芾、許友、傅山等）」
②「近代日中書法交流史（楊守敬、張廉卿、羅振玉らと日本人の交流など）」
③「日本近代の書人（内藤湖南、長尾雨山、日下部鳴鶴、松田雪柯、巌谷一六等）」

● **鈴木　晴彦**（すずき・はるひこ／号貞斎、昭和29年生、学会理事、昭和学院短大講師）
①「日本古代碑の世界」
②「日本金石学研究について」
③「江戸書道譚」

● **高城　弘一**（たかしろ・こういち／号竹苞、昭和39年生、学会幹事、大東文化大学助教授）
①「『香紙切』の謎」
②「料紙について」
③「王朝かな古筆について」
④「『小島切』について」
⑤「古筆学への招待（古筆学入門）」

● **鶴田　一雄**（つるた・かずお／号逸亭、昭和27年生、学会理事、新潟大学教授）
①「中国新出土の書」
②「春秋・戦国時代の文字資料」

● **中村　伸夫**（なかむら・のぶお／昭和30年生、学会常任理事、筑波大学助教授）
①「戦国文字の書法―〈郭店楚簡〉を例として―」
②「清末民国初期の中国書法について」
③「20世紀の中国書法―激動の中の伝統芸術―」

● **名児耶　明**（なごや・あきら／昭和24年生、学会理事、五島美術館学芸部長）
①「遺墨から見る仮名文字の変遷」
②「定家様（定家流書風）の成立の意味」
③「御子左家と伝西行筆古筆」

● **野中　浩俊**（のなか・ひろとし／号吟雪、昭和16年生、学会監事、新潟大学教授）
①「文人 富岡鉄斎―書を中心として―」
②「書の愛好―書を楽しむには―」
③「書と書の周辺―鑑賞の方法・親しみ方―」

● **福田　哲之**（ふくだ・てつゆき／昭和34年生、学会理事、島根大学教授）
①「出土文字資料と中国書道史」
②「習書が語る書の歴史」
③「古代字体の変遷」

● **森岡　隆**（もりおか・たかし／昭和30年生、学会理事、筑波大学助教授）
①「仮名の字形と表記法に見る唐書風の受容」
②「仮名の発達及び手習歌の変遷」
③「古筆復元の試み」

● **横田　恭三**（よこた・きょうぞう／号閑雲、昭和29年生、学会理事、跡見学園女子大学助教授）
①「戦国楚簡文字の変遷」
②「日中交流史―水野疎梅の場合―」

〈役員紹介〉

〔理事長〕

興膳　宏（京都国立博物館館長）

パリで在学研究した貴公子にして、何事にも「性善説」を貫く中国学の権威。フランス語までも操り、人情味豊かな柔軟さを兼備する。

〔副理事長〕

杉村　邦彦（四国大学教授）＝国際局長＝

いつも海外旅行並の大荷物を持って移動する。中身は書斎具一式。行動力とバイタリティーはだれもがシャッポを脱ぐ。「書論」編集主幹。

田中　有（大東文化大学教授）

マイクを持つと、独り漫才の才気を発揮して、緊張の場を一瞬に和らげる貴重な存在。専門の中国簡牘の話なら、一昼夜でもOK。

〔常任理事〕

新井　儀平（大東文化大学教授）

学生の自己紹介欄の「趣味は書」にも、「書はそんなものではない」と諭して妥協がない。書斎は整然。本の並びに寸分の乱れもないとか。

大橋　修一（埼玉大学教授）＝学術局長＝

エピソードには事欠かない自由人。出先不明は毎度のことで、周囲は口を揃えて令室の徳をたたえる。趣味は広く同好との談義をよろこぶ。

萱原　晋（カリタス女子短大講師）＝事務局長＝

慶大の院生の頃から美術ジャーナリズムに手を染め、書道の社会的使命達成に身を投じる。経済人というより文化人の気質に溢れる。

澤田　雅弘（群馬大学教授）＝会報編集委員長兼将来計画検討委員長＝

四十歳まで三時間睡眠を貫いた多読家。学問に対する「深謀遠慮」を感じさせる人。最近は大学人として地域社会への貢献を考えている。

杉浦　妙子（二松学舎大学講師）＝会報編集委員長＝

ある筋の双子タレントと親戚にあたるという。持ち前の気力、体力、口力？　が爆裂する、お姉さま。酒宴の前日には十分な睡眠を！

中村　伸夫（筑波大学助教授）＝編集局長＝

自他共に認める大の野球好きで、日・米を分かたず放送を見逃さない。自身は小・中・高と内野手。中国政府給費の書法留学生第1号。

藤木　正次（日本大学教授）＝財務委員長＝

財務にめっぽう強く、面倒見の良さも天下一品。日本書道史研究、仮名作家としてのほか、硯の研究家としても著名。自宅の棚には名硯がズラリ？

古谷　稔（大東文化大学教授）＝国内局長兼'04大会シンポジウム実行委員長＝

酒を好む美声の持ち主。カラオケはジャンルを選ばないとか。古筆をめぐっては、K先生の論敵で、幾回にも及ぶ誌上論争は有名。

〔理事〕

河内　利治（大東文化大学教授）

詩・書・画・印・学問・教育……三絶では飽き足らず（？）、五絶六絶を視野に入れて活躍する平成の文人。それに、とびきりの中国通。

鈴木　晴彦（昭和学院短大講師）
もとは日本儒学専攻。新式機械に目がないが、ワープロ機能に執着し、PCに遅れをとったのが唯一の例外。忌憚なく意見する人情派。

辻井　義昭（北海道教育大学札幌校教授）
初対面は北海の虎をイメージする。しかし、性格はいたって温厚。かつて、ロンドン大学に客員講師として渡英。書作家としても活躍。

鶴田　一雄（新潟大学教授）
笑顔を絶やさず、マイペースな人と思いきや、用意周到さも兼備する。最近、研究の領域を広げ、学内「敦煌プロジェクト」にも参加。

富田　淳（東京国立博物館主任研究員）
人柄は温厚で誠実。物言いも謙虚で優しく丁寧。ただし、東京国立博物館サッカーチーム「ルーパーズ」では、フォワードをつとめる。

名児耶　明（五島美術館学芸部長）＝講演センター運営委員長＝
野球チーム「ミューゼーズ」を率い、自らもセカンドを守る。NHKの「日曜美術館」ではお馴染みで、数少ない古筆学研究者の一人。

福田　哲之（島根大学教授）
真面目と緻密を極め、授業は九十分を厳守する。楚文の研究会に古文字研究の立場で参画する貴重な存在。王国維の学風の信奉者とか。

森岡　隆（筑波大学助教授）
日課の新聞精読はプロの域。繊細な感覚と折り目の正しい物腰、ダンディーさを支えるのは内助の功。興に乗ると関西弁が噴出する。

横田　恭三（跡見学園女子大学助教授）＝普及委員長＝
車で聴くのは中国語、家では無農薬菜園。何事も堅実な計画派。漢字仮名の他、調和体は自作詩のマルチだが、時に物する達磨絵は不評。

〔監事〕

浦野　俊則（千葉大学教授）＝選挙管理委員長＝
精密・正確・クール。斯界第一のコンピューター歴は三十年。時にはデジタルビデオで孫の姿を追いもするが、体型は二十歳代を保持。

野中　浩俊（新潟大学教授）
繊細かつ大胆で、ウイットに富む。日本海の波の音が届く書斎には、来客が絶えず、富岡鉄斎を髣髴させるその書簡には、ファンが多い。

〔幹事〕

池田　利広（大阪教育大学助教授）
小川　博章（淑徳大学専任講師）
笠嶋　忠幸（出光美術館学芸員）
柿木原くみ（相模女子大学専任講師）
萱　のり子（大阪教育大学教授）
菅野　智明（筑波大学専任講師）
下野　健児（花園大学助教授）
高城　弘一（大東文化大学助教授）
弓野　隆之（大阪市立美術館主任学芸員）

（談話室）

書道作品の総合図録　板倉聖哲

西洋美術史と比べると、東洋美術史は学的基盤の整備が必要なところに気が付かされる。例えば、カタログ・レゾネ。真贋の狭間に対する感覚が異なることもあって、そうした発想はなかなか根付かない。しかし、世界中に如何なる中国書画があるか、その概要は最近の書物の刊行によって知られるようになった。『中国古代書画図目』（2001年刊行終了）は大陸に所蔵される主な収蔵品がモノクロ図版で確認できる。絵画に関してはそれ以外の地域をカヴァーする『中国絵画総合図録』（2001年続編完結）があるが、それに対応する書道作品の総合図録が未だない。各所蔵館の蔵品図録の出版が相次いでおり、それらを取りまとめるハヴ役の登場が待たれる。

伝世拓本の整理　富田　淳

今春、再調査の好機に恵まれた温泉銘は、ペリオが発見した当初の模様を想起させる痛々しさを残しながらも、名にし負う精拓であるとの思いを強くしました。実はこれまで、旧拓は必ずしも精拓ならず、との印象が拭えなかったのですが、永年にわたる過酷な環境などを差し引けば、字口の鋭さ一つ取り上げても、実に凄まじいものです。ところで、現存する唐拓や宋拓との伝承に、歯がゆさがあるもの事実。より正確な採拓年代を特定するには、拓調や碑面のより詳細かつ体系的な整理が必要となります。先行業績を踏まえながら、少しずつ歩を進めたいと思います。

文人と文人書画　鄭　麗芸

一月十日から三月七日まで、「（没後八十年）最後の文人・鉄斎―富士山から蓬莱山へ―」展が出光美術館で開催された。これを通して、伝統文人が求めた詩書画「三絶」の理想境地の素晴らしさを改めて実感し得たのみならず、文人の理想境地がどのような現実的意味を持つかについても、新たに考えさせられた。したがって、古来中日文人の共通点と相違点などについては、今後の大きな課題となろうかと思う。

六朝墓誌のデジタル化　東　賢司

近年相次いで発見される長江中流域出土の簡牘資料の影に隠れているが、石刻においても新発見資料がかなり多くなっている。現在、魏晋南北朝時代の墓誌を整理しているが、合計一千件を超え、新出土資料はその三割ほどを占めている。これを整理するに当たり、全データのデジタル化を考え、出土報告書・出土物・出土状況・釈文など、できる限りの情報をパソコンに取り込んでいる。電脳に関する自分の知識不足を嘆きながら、今日も作業は続いている。

学会に期待すること　下野健児

今秋、台北で唐代の草書をテーマとするシンポジウムが開かれる。ここ数年、台湾では「自叙帖」をめぐる論争が活発であるようだ。手元にも、「自叙帖」論争に関わる書物、論文が届いている。その内容については様々な意見があるであろう。しかし、一つの作品を取り上げて論争が盛り上がるという現象は、うらやましい限りである。著名な作品であっても、未解決の問題が数多く残されている現状を考える時（これは作品研究だけには限らないが）、我々の学会でも、このような論争がまきおこる機運が必要ではないだろうか。

寒山新聞資料と正平展　神野雄二

山田寒山関係の明治・大正期の新聞資料を読んでいる。これは、いずれ翻刻刊行したいが、それだけの価値はある。新聞記事や雑誌等の逐次刊行物は発行当時の時事情報を得るに最適である。当時の文化事情、芸壇の風流が窺え興味が尽きない。これを読むに寒山は多芸多才、いかにも飄逸との言葉があてはまる文人であることが分かる。別に、本年、東京学芸大学硯心会主催の山田正平展、並びに篆刻美術館主催の山田正平展が開催されると聞く。正平の芸術が世に喧伝されることは真にうれしい。

鳴鶴展　岡村　浩

明治四十年代に建った素封家の純和風迎賓館を会場として、「近代書の源流日下部鳴鶴展」を開催した。そもそも掛軸や扁額・屏風を畳敷空間において鑑賞することが余程稀なことになった今日、ささやかな地方の企画ながら、日本文化の原点にこだわりをもっての三日間だった。しっとりと心落ちつく居室、緑のしたたる庭園、木造の香り等々・・。床の間の御軸をみていると、生活の中にいきる書とは、という大命題を考えるひとつの手懸りが、ここに確実にあるといえる。昨年梧竹展をやったのであとは一六なのだが、地味過ぎましょうか。

◆会員動静

○金子卓義（会員）＝第四十五回毎日芸術賞受賞
○新井儀平（理事）＝第六十回日本芸術院賞・恩賜賞受賞
○柿木原くみ（幹事）＝相模女子大学専任講師新任
○高木厚人（会員）＝大東文化大学教授昇任
○河内利治（理事）＝大東文化大学教授昇任
○河野隆（会員）＝大東文化大学助教授昇任
○福田哲之（理事）＝島根大学教授昇任
○萱のり子（幹事）＝大阪教育大学教授昇任

編集後記

◆さしたる深慮もないまま、会報編集委員長なる大役を仰せつかってしまった。案の定最初からミスばかりで、澤田委員長にオンブにダッコ。この体重では、細い氏を骨折させてしまわないうち仕事を覚えねば。幹事の皆さんが仕事を熟知されているので救われる。新しい会報のあり方への思い、今後の展望なるものも少しはあるが、その前にまずはわが身の反省から。（杉）

◆今期より会報編集は、会報編集委員会の職掌となり、委員長二名の変則体制で再スタート。創刊以来指揮された鈴木副事務局長の功を称えたい。また編集委員には、幹事の小川・柿木原・高城の三氏に再任願い、新任の幹事笠嶋氏にも加勢いただくことになった。各委員に感謝したい。（鳳）